

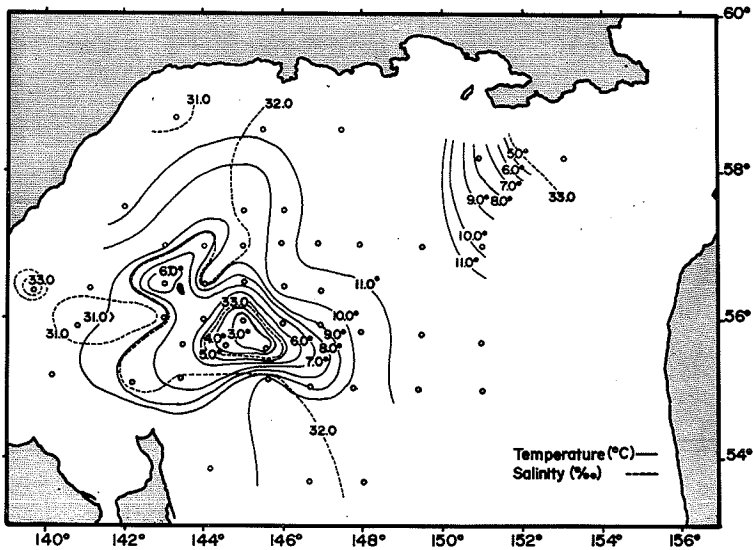
13. オホーツク海中北部海域の海況特性

島崎 健二 (北海道大学水産学部)

1969年より論者はオホーツク海におけるサケ・マス幼魚の回遊に関する生態調査のため、幼魚の採集ならびに環境調査を行なっている。これらの調査結果からオホーツク海中北部の海況特性について述べる。

1. オホーツク海中北部海域の海況

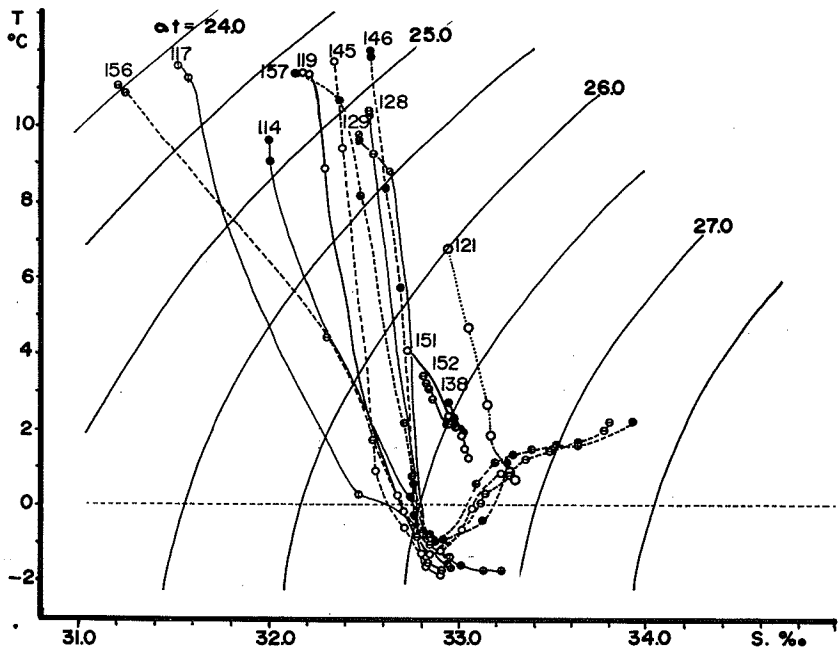
8～9月の中北部海域は次の4水域に分ける事が出来る(第1、2図)。



第1図 10m層の水温塩分水平分布図

- i) 北西部水域 表層高温であるが低層では極小水温となり、いわゆる中冷水はない。特に -1.7°C 以下の極めて低温な水帯が低層に認められる(第2図 114, 117, 119)。
- ii) マガダン南部水域 表層は低音高鹹である。低層との温度差は顕著でないが塩分の変化は少なく、西側水域とは南北に潮境が形成される(第2図 121)。
- iii) オホーツク海中央部水域 2図 145, 146 等破線に認められる様に、中冷水の明らかな水域はオホーツク海中央部より南部にかけて認められるが、北西部、北東部では認められない。

iv) サハリン北東冷水域 50°N 144°E 付近には表層から低層まで低温高鹹で変化のない水域が存在する。この低温域は宇田¹⁾、梶浦²⁾、北星丸³⁾等によっても確認されており、中北部海域での特異な水域である。またこの低温域の周辺は円形に近い顕著な潮境を形成するが、20~30mの躍層下部付近では水温塩分ともに周辺のそれと類似し、それ以深では逆に高温高鹹となる。水深が浅いため100m層を基準にした力学的高低図(図省略)から10、20、30、50mの各層の流れは、10、20mでは反時計廻り、また30m以深では時計廻りとなり、水温塩分のほか酸素飽和度(北大、木谷氏の資料)も略一定であって、単なる湧昇流とは考えられず、上下の混合が行なわれているのではないかと思われる。

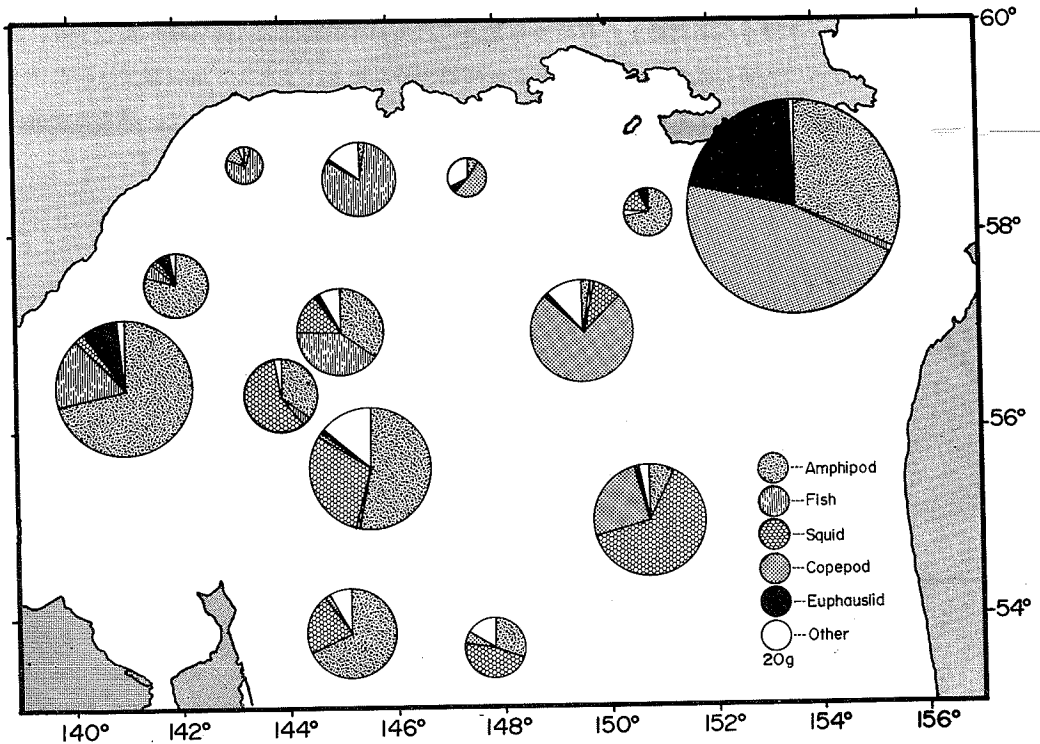


第2図 水域によるT-Sダイアグラムの例(数字は観測点番号を示す)

2. 餌生物の分布

第3図に稚魚ネットによる餌生物の採集結果を示す。種類ならびに量は各採集点でそれぞれ異なるが、前述の水域区分と類似した傾向を示す。

北西部水域では Amphipod, Fish, Euphausiid が多い。Euphausiid が最も多く採集されている水域はこの水域のほかマガダン南部海域である。この水域はこのほか Amphipod, Copepod も多数採集されている。また中央部よりサハリン北東の冷水域にかけては、Squid が多く認められる。Copepod は東側に多いが、Fish は西側に多い。なお表層



第3図 稚魚ネットによる表層餌生物の組成および分布

サケ・マス流網による混獲物はニシン、スケトウ等であるが、スケトウの魚獲が多かった水域はアムール海湾北部ならびにマガダン南部海域であって Euphausiid の分布域であり、胃内容物中ほとんどが Euphausiid である事は一般に言われているスケトウダラの食性と類似している。

以上の様にこの水域での水理学的環境、餌生物ならびに魚類の分布との関連性については、スケトウダラにおいても興味のある問題であろう。

参 考 文 献

- 1) 宇田道隆, (1934), 日本海, 黄海, オホーツク海の平年各月海況「水試報告」第5号.
- 2) 梶浦欣二郎, (1949), オホーツク海の夏季海況に就いて, 日海誌, 5(1).
- 3) 北大水産学部, (1959), 海洋調査漁業試験要報 第3号